

第十九回 孔明三たび周公瑾を気らす、馬孟起 兵を興して恨みを雪ぐ

—— 周瑜の死、馬超と許褚

(前回から今回まで)

劉備と孫夫人は、ひそかに呉からの逃亡をはかります。孫権は追つ手を差し向けますが、武芸が得意な孫夫人は自ら趙雲とともに後詰をして、劉備を逃がします。次いで、周瑜軍が待ち構えていて危機におちいりますが、これも諸葛亮と関羽が救け出し、無事に二人は逃げおおすことができました。

ここで、周瑜は次の策略を考えます。それは、かねて劉備が、蜀の劉璋は自分と同じ漢室の一員であるから取るのに忍びないと言うのを、呉が劉備にかわって蜀を攻めとるから、それで荊州と蜀を交換しようというものでした。しかし、実はこれは口実で、呉軍が蜀を攻めるために荊州を通過するとき、一挙に荊州を奪い取ってしまおうという計略でした。

魯肅が劉備のもとへ行ってその提案をすると、劉備は諸葛亮の指示通り、呉軍が通るときは大歓迎しますと言います。魯肅は、今度はうまくいったと喜び、周瑜に報告します。

(本文抄)

周瑜はからからと笑いながら、「今度こそ私の計略にかかったぞ」と言うと、孫権にこのことを報告する一方、程普ていふに加勢ていふさせる手はずを整えた。

周瑜はこのとき矢傷もおおかた癒いえたので、水陸合わせて五万の大軍を率い、荊州めざして出発したのだった。

周瑜は船中でも、諸葛亮がまんまと計略にかかったと、上機嫌だんしょうで談笑だんしょうしていた。夏口かこうに到着すると、周瑜が「荊州から迎える者が来ていないか」とたずねたところ、「劉皇叔りゅうこうしゅくからの使者糜竺びじく殿が、お目通りめとおに来ております」と報告があつた。

周瑜は呼び入れ、我が軍を歓迎する準備は整っているかとたずねると、糜竺は答えた。

「わが君にはすべて準備されて、お待ちになつております」

「皇叔はどこにおられるのか」と周瑜。

「都督ととくに一献いっけん差し上げたいと、城門の外で待つておられます」と糜竺。

「今度の遠征は、すべてきみたちのためなのだから、心して用意してもらいたい」と周瑜。糜竺は承知して一足さきに帰った。

呉の船団は、まもなく公安に到着したが、誰も迎えに出ていない。

周瑜は、船を急がせて荊州の手前十里余りまで来たが、見えるのはただ広々と静まりかえった水面ばかり。

そこに物見の兵から報告があり、「荊州の城壁の上に二本の白旗が立っているだけで、人影もありません」との事。

不審に思った周瑜は、みずから上陸して馬に乗ると、三千の精鋭部隊を率いて荊州城へと向かった。城下まで来ても、何の動きもない。

周瑜は、兵士に「門を開ける」と叫ばせた。と、城壁の上から「誰だ」とたずねる声が出たので、呉軍の兵士は「呉の周都督しゅうとくがここに到着しゅうとくだぞ」と答えた。

その言葉が終わらないうちに、拍子木ひょうしぎが鳴ったかと思うと、物見櫓の上に趙雲が姿を現して言った。

「都督が出向いて来たとは、いったい何の用か」

「お前らに代わって蜀を攻略してやるのだ。聞いていないのか」と周瑜。

「軍師の孔明どのは、とうに都督の『途みちをかりて虢かくを滅ぼす（春秋時代の故事）』計略をお見通しだ。また、わが君は『私と劉璋とともに漢王朝の一門だから、義に背いて蜀を取ることはできない。もし、呉がほんとうに蜀を取るのなら、私は髪をふり乱して山に入り、信義

を全うする』と申されている」と趙雲。

周瑜はこれを聞くや、馬首をめぐらして、もどろうとした。

このとき、伝令でんれいの者が、駆けて来て報告した。

「物見ものみからの報告では、敵の軍勢が四方から攻めて来ました。関羽が江陵こうりょうから、張飛が秭歸しきから、黄忠が公安から、魏延が孱陵せんりょうから、こちらに向かっています。軍勢がどのくらいか見当もつきません。関とくの聲が轟とせうきわたり、口々に周瑜を生け捕りにせよと叫んでおります」

周瑜はあつと叫ぶなり、矢傷やきずがまたも破裂し、もんどりうって馬から転ころがり落ちた。

(解説)

周瑜が、直接蜀を攻略しようとしたのは史実です。しかし、それは全く別の戦略的観点からのものでした。当時、蜀えんしゅう(益州)は劉璋が支配していましたが、漢中かんちゅう(蜀の北)の張魯ちやうろの攻撃を受けて動揺してしました。

『三国志』周瑜伝で、周瑜は孫権に次のように述べます。

「『いま曹操は(赤壁の戦いで)敗戦したばかりで、自分の身辺から変事がおこるのを心配しており、とても將軍(孫権)に戦いを挑むことなどできません。どうか奮威將軍ふんいの孫玲そんれいと

ともに軍勢を進めて、蜀を奪取することを認めてください。蜀を手に入れたあと、さらに張魯を併呑（へいどん）し、そのうえで奮威將軍に蜀に留まって守りを固めていただければ、西涼の馬超（せいりょうばちょう）と同盟をうまく結べます。その時、私が蜀よりもどり、將軍（孫権）とともに襄陽を根拠地（じょうよ）として曹操を追いつめてゆけば、北方制覇も夢ではありません。孫権は、この計りごとに同意した」

蜀を攻略してから、曹操と敵対していた西涼の馬超（せいりょうばちょう）と結び、馬超には西から曹操を攻めさせ、孫権と周瑜は長江中流の襄陽から北上して曹操を倒すという戦略です。

周瑜は孫権の同意を取りつけると、遠征の準備のため南郡（江陵）にもどろうとしますが、その途中、巴丘（はきゅう）というところで病により急逝（きゅうせい）します。ときに周瑜三十六歳。

つづいて、『三国志演義』は周瑜の死を描きます。

矢傷がまた破裂した周瑜のもとに、劉備と諸葛亮が楽しそうに酒を飲んでいるとの報告が入ると、周瑜はまたまた激怒します。これに追い打ちをかけるように、諸葛亮からの手紙が届きます。

（本文抄）

周瑜が開封して読んだところ、手紙にはこう書かれていた。

「柴桑さいそうでお別れしてよりこのかた、今に至るまで夢寐むびにも足下そつかを忘れず、足下には西川せいせん（蜀のこと）を取ろうとしておられる由よしを聞き、それはかなわぬことと憂うれえています。

そもそも益州えきしゅう（蜀）は兵は強く地勢ちせいも堅固にして、劉璋が懦弱だじやくであつても、十分守りきることができるとしよう。

今、遠征の大軍をおこし、万里を遠しとせず、成功を望まれても、これは呉起ごき（呉子。孫子と並ぶ兵法家）や孫武そんぶ（孫子のこと）でもかなわぬこと。曹操は赤壁で敗北してこのかた、かたときも報復を忘れたことはありません。今、足下が遠征に出られた隙に、曹操が攻めて来たならば、江南は木こつ端つば微塵みじんになります。私は、これを座視ざしするに忍びず、特にこのことを申し上げるのです。ご明察をお願いいたします」

周瑜は、読みおわると長いため息をもらし、紙と筆を取り寄せると、孫権に手紙を書き、諸将を集めて言った、

「私は忠義を尽くし国家に恩返ししたいと思っていたが、もはや天命てんめいが尽きた。みなは呉侯によくお仕えし、力を合わせて大業を成し遂げてくれ」

言うなり気絶きぜつしたが、少しして目を開けると、天を仰いで、

「私をこの世に生まれさせながら、どうして、諸葛亮もまた、同じく生まれ合わせさせたのか」と、繰り返し叫んで絶命ぜつめいした。

ときに三十六歳。建安十五年（二一〇）冬、十二月三日のことであった。

（解説）

『三国志演義』は、諸葛亮の狡猾こうかつな対応に、すること為すことすべてうまくいかず、万策尽ばんさくき、怒りの果てに亡くなる周瑜を描きます。

周瑜の主であり盟友めいゆうでもあった孫策（孫権の兄）は、「官渡の戦い」の隙をついて、曹操の根拠地きよの許を急襲しようとしますが、実行直前に横死おうししてしまいました。

周瑜もまた、北方侵攻を計画しながら急死します。時に三十六歳。若き二人の英傑えいけつは、生涯で最高の輝きをはなとうとした瞬間、惜しくも亡くなってしまいます。どちらも、極限状態にあっても血路を切り開くタイプの人でした。二人がもう少し長命であれば、三国時代の光景は、かなり違ったものになっていたことは間違いありません。

『三国志』に、死に臨のぞんでの上疏じょうそが書かれています。

「いま天下は多事多難で戦いの絶え間がなく、私は日夜このことを憂慮ゆうりょいたしております。どうか陛下には事がおこるのに先んじて配慮をなされ、みなの方が安心してから心を楽しませるようになさいますように。

現在、曹操と敵対しておりますうえに、劉備が近くの公安におり、国境線も遠くまで及ばず、民衆もまだ心を寄せておりません。どうかくれぐれも良将を選んで鎮撫ちんぶに当たらせられますように。魯肅は知略ちりやくの点で十分に任にたえますゆえ、私の後任となされますよう、お願い申し上げます。そうしていただけますならば、私は死んでも何の思い残すこともありません」（『三国志』魯肅伝）。

自分が亡き後の取るべき方策を、孫権にアドバイスしています。主君かつ義兄弟でもあった孫策、そしてそのあとを継いだ弟の孫権と二代にわたって仕えきる見事な生涯でした。

かつて呉の勇将程普ていふは、はじめ年下の周瑜を軽侮けいぶする態度をとっていましたが、やがて周瑜に心服するようになり、「周瑜と交友することは、まるで芳醇ほうじゆんな酒を飲むようなもので、知らず知らずのうちに酔いがまわってしまう」と人に語っています（『三国志』周瑜伝）。周瑜の風格ふうかくが目には浮かぶような話です。

孫権は周瑜の遺言をうけて、魯肅を周瑜の後任の総司令官に任命します。

そして、諸葛亮は、周瑜を弔うため呉に向かい、そこで「鳳雛」の龐統に出会います。

龐統は「赤壁の戦い」で「連環の計」を成功させた人物で、諸葛亮は推薦状を書いて、劉備に仕えるように言って渡します。

魯肅もまた、龐統を孫権に推薦しますが、孫権は、彼の妙な風貌（「容貌醜怪」）と人を小馬鹿にしたような態度に、気分を害してしまいます。

龐統の才能を惜しんだ魯肅は、あらためて劉備に仕えるように言い、こちらも推薦状を書いて渡します。

こうして、龐統は劉備のもとへ行きますが、諸葛亮と魯肅からの推薦状を見せなかつたので、龐統は地方の閑職にまわされてしまいます。すると、龐統は一か月間酒ばかり飲んで全く仕事をしません。それを聞いた劉備は、怒って張飛を派遣してきます。張飛に詰問された龐統は、溜まっていた仕事を半日で片付けてしまい、張飛はその能力に感心します。ここで劉備は、あらためて龐統の才能を認めることになりました。

かつて司馬徽しばきから、二人のうち一人でも得られたら天下は平定できるといわれた「鳳雛ほうすう」
と「臥龍がりりゆう」が、二人とも劉備の幕下まくかに加わったのです。

いっぽう曹操は、鄴ぎょうに壮麗な銅雀台の宮殿を築き、北中国の支配者としての威嚴いげんをみせつけます。そして、曹操は、再び江南を攻撃しようと考えます。しかしその隙に、西から攻撃される危険を取り除くため、西涼の軍閥馬騰くんぱつばとうを許きよに呼び寄せて殺してしまいます。

馬騰の息子馬超ばちようはこの知らせに激怒し、馬騰の盟友韓遂かんすいとともに挙兵きよへいします。たちまち長安を占領し、ついで潼関とうかんも占領してしまいます。

曹操が大軍を率いて、潼関へやってきました。

(本文抄)

曹操が大軍を率い、潼関の前まで攻め寄せたとき、ちようど西涼の軍勢と出くわした。西涼の兵を眺めると、いずれもたくましい兵士ばかり。

また、馬超はといえば、白粉おしろいをはいたような顔、紅べにをさしたような唇、腰は細く肩幅は広く、声は雄々しく人を圧する雄姿に、白の戦袍せんぽう、銀の鎧よろい、手に長い鎗やりを持ち、陣頭で馬を馳はせている。

曹操は思わず、これはあっぱれと感嘆し、みずから馬を乗り出して馬超に言った。

「おまえは漢王朝の名将（後漢の名将馬援のこと）の子孫でありながら、なぜ謀反するのぼうはんのか」
馬超は齒ぎしりをして、大声で罵った。

「逆賊曹操め、天子をないがしろにするその罪、生かしておけぬ。わが父と弟を殺したふぐたいてん不俱戴天の仇だ。おまえの生肉を食らってやるぞ」

言いおわると、鎗をしごいて攻めかかって来た。

曹操の背後から于禁うきんが出て、両馬ぶつかりあったが、八、九合戦ったところで、于禁は敗走した。ついで張郃ちやうこうが迎え撃ったが、これまた二十合戦ったところで敗走した。さらに李通りつうが入れかわって躍りだすと、馬超はひるむことなく受けて立ち、数合戦ったところで、鎗の一撃で李通を突き落とした。

馬超が背後の軍勢を鎗で招くと、西涼の軍勢はいっせいに突撃し、曹操軍は大敗を喫した。西涼軍の勇猛さに、曹操軍の左右の大將は誰も齒が立たなかつた。

馬超は一気に本陣に突入し、曹操を生け捕りにしようとした。

曹操は乱軍のなかで、「赤の戦袍せんぼうを着たのが曹操だ」と西涼軍が叫びかわすのを聞き、馬上で慌てて赤の戦袍を脱いだ。

また「長い髯ひげのやつが曹操だ」という叫び声が聞こえたので、慌てふためいた曹操は、腰の刀を抜いて髯を切り落とした。

と、曹操が髯を切り落としたことを馬超に知らせる者があり、馬超は皆に、「短い髯のやつが曹操だ」と大声で叫ばせた。これを聞いた曹操は、旗の端を破り取り、頭をくるんで逃げた。

曹操が逃げていると、一騎が追いかけて来たので振りかえれば、まさに馬超。

曹操は仰天した。左右の大将は馬超が迫って来たのを見ると、我われさきに逃げ出した。

「曹操、逃げるな」と、馬超が大声で叫ぶと、曹操は思わず鞭むちを地面に落としてしまった。見る間に馬超は追いつき、背中めがけて鎗やりを突き出した。曹操は木の間を縫ぬって逃げようとしたが、馬超は鎗やり先が木に突き刺さり、急いで抜いたときには、曹操はすでに遠くに逃げ去っていた。

(解説)

馬超は『三国志演義』では二回目の登場です。初登場は、この講座では取り上げませんが、父の馬騰が李傕・郭汜りかく・かくしと長安近郊で戦う場面です。

「顔の色は冠の白玉のごとく、眼は流れる星のごとく、虎のごとき体軀たいいく、猿のごとき臂ひじ、腹は彪ひょうのごとく、腰は狼おおかみのごとき一人の若き將軍が、手に長い鎗をしごき、駿馬しゅんまにまたがって陣中から躍りだした。これぞ馬騰の子の馬超、字を孟起もうきという、年まさに十七歳、武勇当たるものなき大将である」と馬超が十七歳のときです。

それから十九年、父馬騰の仇討ちのために立ち上がります。

『三国志』では、馬超が反乱を起こしたので、都にいた馬騰が殺されています。つまり、史実では話が逆です。

『三国志演義』は、馬騰が曹操に殺されたので、その仇討ちのために馬超が挙兵したことにして、馬超の挙兵に正統性をもたせています。

馬超の描写は、白粉を塗ったように色白く、唇は紅をさしたよう、腰は細く肩幅は広く、声は雄々しく、白い戦袍に銀の鎧、手に長い鎗を持ち、陣の前に馬を立てたと、初登場の時と同じく、見事な風格の部将として描かれます。

人材好きの曹操は、これを見て素晴らしい武将だと感嘆します。

馬超は、あと一步のところまで曹操を追いつめますが、おしくも取り逃がしてしまいます。このあと、曹操は馬超軍の退路を断つため、黄河の東から渭水いすいの北岸に渡ろうとします。

(本文抄)

さて、曹操は軍勢を三手に分け、北進して黄河へと向かった。渡河地点とに到着したところ、日が昇りはじめた。曹操は精銳を選んで、先に渡って陣營を築かせることとし、自分は身辺警護の將兵百人を従えて、軍勢が渡るのを見ていた。

と、突然、

「うしろから白い戦袍の將軍が来ます」と報告があつた。

皆それが馬超だと知り、いっせいに船に押しかけ、われ先に船に乗ろう争い、はげしい騒ぎになる。

曹操は少しもあわてず、腰を下ろしたまま、劍に手をかけて騒ぐなど指示したが、人の叫び声いなと馬の嘶いなきが迫ってきた。そのとき、船上から一人の大將が岸に飛び移り、

「敵が来ました。どうか早く船にお乗りください」と言った。曹操が見れば許楮きよちよである。

曹操は「何をうろたえるか」と言いながら、ふりかえって見ると、馬超はすでに百歩余りのところまで来ている。

許楮が曹操を引っ張って船に乗り移ろうとしたとき、船はすでに岸から一丈余りも離れて

いたので、許褚は曹操を背負うや岸を蹴って飛び移った。

将兵はみな河に飛び込み、船べりをつかんで、先を争って船に乗りうとしたので、小さな船はひっくりかえりそうになった。

許褚は刀を手にして、船板にかかっていた手をことごとく斬り落とした。人々が水中に倒れた隙に、急いで下流めざして船を漕ぎ出した。

許褚は船首に立ち、しきりに棹さおを操り、曹操は許褚の足もとに身を伏せていた。

馬超が岸边まで来たとき、船はすでに河のまんなかまで行っていた。そこで馬超は弓を手に取り矢をつがえながら、大将たちに河に沿って追いながら矢を射かけよと命じ、雨のように矢を浴びせかけた。許褚は曹操を守ろうとして、左手で馬の鞍くらをもちあげ矢を防いだ。

馬超の矢は百発百中で、漕ぎ手は弦げんのうなりとともに水に落ち、ついに数十人がみな射倒された。船は舵取りかじとを失い、急流にもまれてくるくる回ったが、許褚は、両足の間に舵を挟み一方の手で棹さおを使い、もう一方の手で鞍をあげて曹操を守った。

(解説)

渡河の途中、馬超らは雨のように矢を射かけてくる。しかし、許褚は馬の鞍くらで矢を防いで

曹操を守ります。この場面は、ほぼ『三国志』許褚伝の記述の通りです。許褚がいなければ、曹操はどうなっていたかわかりません。

許著は以前にも曹操の危機一髪を救っています。

「官渡の戦い」の時、袁紹に気脈を通じた暗殺者たちが曹操の命を狙っていましたが、剛勇の許褚が側にいるため決行出来ずにいました。そこで彼らは、許褚が外出する日を狙い、刀を懐ふところに曹操に近づきます。ところが、いざ決行というとき、そこに許褚の姿がありました。許褚はなにか胸騒ぎがしたため、とって返して曹操の警護にあたっていたのです。暗殺者たちは思わず顔色を変えたので、許褚は彼らの陰謀に気づいて即座に打ち殺します。

こうして、許褚は二度まで曹操の命を救っているのです。これは『三国志』に書かれる史実です。このような事もあって、曹操は許褚を深く信頼しています。

あやうく危機を脱した曹操は、黄河沿いに南下して、渭水の北岸に軍を進めます。

そして、そこから船で浮橋うきはしをつくって南岸と結び、両岸に陣営を作って、馬超の騎馬軍団を防ごうとします。しかし、馬超は陣営ができる前に攻撃をしかけ、陣営も浮橋も破壊してしまいます。

「氷城の計」

困り果てた曹操の元に、婁子伯ろうしはくという人物が現れ、曹操に「今は氣候が大変寒い時期です。砂を盛り上げて城壁を作り、水を掛けるだけでよいのです。そうすれば、一晩で陣営が完成します」と献策します。

曹操は、砂の城壁をつくり水をかけておきます。すると、一夜明けると水が凍り、「氷の城」が完成していました。これで、曹操は馬超軍と迎え撃つことができたのです。これが「氷城の計」です。

この話は、『三国志』武帝紀の注に引く「曹瞞伝そうまん」にあります。注には、当時は九月であるから水はまだ凍るはずがないとの疑念もあわせて書かれています。

（本文抄）

翌日、馬超は大軍を集め軍鼓ぐんこを鳴らして前進した。曹操は許褚ひとりを従え、みずから馬に乗って出陣し、大声で呼ばわった。

「孟徳もうちとく（曹操の字）がただ一騎でまいったぞ。馬超よ、出て来い」
馬超は馬に乗り鎗をかまえて出撃てくると、曹操は言った。

「おまえはわが方には陣營が築けないと馬鹿にしていたが、今、一晩でできあがったぞ。さつさと降参せよ」

馬超は激怒し、討って出て曹操を生け捕りにしようとしたが、ふと見ると、曹操のうしろにすさまじい形相で、大刀をひっさげて立つ者がいるではないか。馬超は許褚ではないかと思ひ、鞭をふりあげて問いかけた。

「おまえの軍中に虎侯とかいう者がいるそうだが、どこにいるのか」

許褚は刀をひっさげ大声で叫んだ。

「わしが譙郡の許褚だ」

眼光はすさまじく、威風はあたりをふるわせた。馬超はたじたじになって前に進もうとはせず、馬首を返した。曹操も許褚を引き連れて本陣にもどった。

許褚は言った。

「明日、必ず馬超を生け捕りにしてみせます」

「馬超は英雄だ。油断してはならぬぞ」と曹操。

許褚は馬超に、明日、決死の戦いをしようと、挑戦状を送りとどけた。

馬超は、これを受け取るや、激怒して、明日は必ず「虎痴」を殺すと返書をよこした。

翌日、馬超は鎗をかまえ馬を飛ばして、陣の前に出ると、声を張り上げて叫んだ。

「虎痴よ、早くと出て来い」

門旗もんきの下にいた曹操は、諸将を顧かえりみて言った。

「馬超の剛勇は呂布りよふに劣るまい」

その言葉が終わらないうちに、許褚は、馬を蹴けた立て刀をふりまわしながら討つて出た。

馬超は鎗をかまえて迎え撃つ。百合以上も戦ったが勝負はつかず、馬が疲れはてたため、

双方自陣にもどつて馬を取り替えると、また陣の前に飛び出して、さらに百合以上も戦ったが、やはり勝負がつかない。

許褚はいきり立ち、陣中に飛んで帰るや、鎧よろいかぶとを脱ぎ捨て、真っ裸になって刀をひっさげ、馬に飛び乗つて馬超に斬りかかったので、両軍の将兵はあつけにとられて眺めていた。

二人はまた三十合以上戦い、許褚は力をふるつて刀をふりあげ、馬超に斬りかかった。

馬超はひらりとこれをおかし、許褚の胸元むなもとめがけて鎗を突き刺したところ、すかさず許褚は刀を棄てて鎗をつかみとり、二人は馬上で鎗を奪い合ったが、はげしい音とともに、鎗の柄えをへし折ってしまった。かくして二人は手に残った半分の柄で殴り合いを始めた。

(解説)

ここでは、馬超と許褚の一騎打ちが描かれます。両者の力は互角で、勝負がつきません。途中、許褚は、こんなものはいらんと鎧よろいを脱ぎ棄て、上半身裸になって、馬超と渡り合います。馬超の持っていた鎗が奪い合いになり、ついに折れてしまいます。そして、その半分になった鎗で、二人はなおも戦い続けます。結局、この激闘は勝負がつかずに終わりました。

戦いが終わり、馬超は、許褚ほど強い奴と戦ったことは無いと語り、許褚の強さを認めています。許褚と馬超は、互角の強さというところでは、

しかしこの後、馬超と韓遂はしだいに劣勢となって曹操軍に前後を挟まれてしまい、和平を申し入れます。曹操は、参謀賈詡かくの計略に従い、偽ってこれを許します。続きは次回で。